

プロローグ 「帝国」をめぐる、新しい物語を探して

内田 樹

みなさん、こんにちは。内田樹です。

今回の『一神教と帝国』はイスラーム法学者の中田考先生、トルコの大学で日本文化を講じているスーフイズム研究者の山本直輝先生との鼎談^{ていだん}です。

中田先生との対談本『一神教と国家』（集英社新書、二〇一四年）の続編に当たります。本の趣旨は、日本人にはあまりなじみのない「イスラーム圏の人々の世界と人間の捉え方」について正確で深みのある知識を提供することです。前著と同じように、内田が「一般的日本人」を代表して、イスラームが専門のおふたりにあれこれと初歩的な質問をし、それにふたりの碩学^{せきがく}がお答えになる、という結構であります。

内田が「一般的日本人」を代表すると聞くと「それは官命詐称じゃないか。あいつは変な日本人だぞ」と眉をひそめる人がいるかも知れませんが、今回の僕のミッションは「イスラーム

のことをろくに知らない日本人」という立場を誠実に務めることですので、その辺りのことはスルーしていただきたいと思えます。

中田考先生とお話をするときは、たいていイスラームをめぐる政治と歴史の話になるのですけれども、今回は山本直輝先生というイスラーム圏で日本文化を講じている個性的な研究者が加わりましたので、イスラーム文化と日本文化の接点という、ふだん日本のメディアではまづ論及されることのないテーマをめぐる対話になりました。

読者のみなさんもほんやりと聞き知ってはいると思いますが、「イスラーム圏では日本のマンガとアニメが大人気」なんです。でも、どうして人気があるのかについて踏み込んだ分析をしたものを僕はこれまで目にしたことがありません。山本先生の着眼点は「師弟関係」と「修行」について、この二つの文化圏にある種の親和性があるというところにあります。これは僕もようやくびつくりしました。こういうふうになんか思いがけないところで「点と点が結びつく」と僕はわくわくします。

「プロローグ」として、ちょっと変な話をしたいと思えます。少し長くなりますけれど、どうぞご容赦ください。

この鼎談の中では部分的にしか言及されない話なんですけれども、山本先生から『スター・

ウォーズ』と修行についての論考（これは先生がトルコの雑誌に寄稿したものだそうです）をご恵与いただきました。それがまことに示唆的なものでしたので、「プロローグ」（というよりは「予告編」）のつもりで、その説をご紹介しますし、併せて卑見を申し述べたいと思います。まずは山本先生の論文の一部をご紹介します。

日本のマンガの重要なテーマは師匠に導かれての精神的な成長である。この特徴は西洋世界のドラマや映画と比べたとき、より明確になるだろう。例えばマーベルヒーロー映画のシリーズに『ドクター・ストレンジ』という映画がある。世界的に著名な医師が魔法使いの師匠と出会うことで自らの魔法使いになるというストーリーであるが、映画では主人公が師匠から教わることはほとんどなく、主人公も魔法使いにならなかつた。しかし、続編の『アベンジャーズ』では主人公のストレンジはいつのまにか最強の魔法使いのキャラクターとして登場する。なぜ？ どうやって？

また私が最も好きなアメリカ映画のシリーズに『スター・ウォーズ』がある。従来のシリーズではジェダイは師匠と弟子の関係性がストーリーの大きなテーマであった。しかし新シリーズ（続三部作）の主人公は、師匠からなんの教育も受けることもないまま『スタ

「I・ウォーズ」の歴史上もっとも強いジェダイになった。なぜ？ どうやって？

西洋世界のナラティブでは師匠や魔法など、東洋からインスピレーションを受けたと思われる要素はちりばめられているが、それらが有機的に機能していることはほとんどない。なぜなら西洋世界ではアイデンティティは定義されるものであり、他者とのかわりによって醸成されるものではないからだ。

日本の少年マンガのナラティブを見てみると、いかに教育による精神の成長に重きが置かれているかが分かる。『HUNTER×HUNTER』など、勝負そのものはほとんど問題になっておらず、トレーニングを通じた自己理解の深化そのものが作品の中心的テーマである。ジン・フリークスの言葉を借りれば、「旅の過程そのものを楽しむ」ことこそ日本マンガの精神性なんだろう。自分が何者であるかを自分で規定すること、自分が望むものを得ること自体には何の価値もないのだ。

少年マンガは「異質な存在」としての師匠に導かれることで、異質な自分自身の理解を深めていく。しかしその成長によって達成されるのは自己完結した人間観ではない。他者によって導かれる自己は、他者を導くことによって成長するのだ。

『呪術廻戦』の主人公虎杖の哲学はおじいさんの遺言「オマエは強いから 人を助けろ」

だった。

アメリカ超大国の歴史の比喩である『シビル・ウォー…キャプテン・アメリカ』では、キャラクターたちが自らのヒーローとしての力を他者の管理の基に置くか、それとも自己責任にするかで争う。そのどちらのグループにも超大国の市民特有の傲慢さが存在する。

日本の少年マンガは、そのような大きなストーリーには加担しない。あくまで師匠と弟子という人間個人の精神的成長に主眼を置いている。

その意味では、日本の少年マンガは帝国のソフトパワーではなく、我々が心から望んでいるロールモデルを提示しているのではないだろうか？ このロールモデルとは過ちの無い完全無欠の存在ではない、我々と同じように過ちを犯し、後悔し、それでも他人のために生きたいと願う人間である。『NARUTO―ナルト―』のカカシ先生、『呪術廻戦』の五条先生は実は自らも孤独さと後悔を胸に抱えた人間である。彼らが『シビル・ウォー…キャプテン・アメリカ』のようにヒーローの活動制限のためにロビー活動を行うキャラクターであれば、彼らの魅力は減るだろう。

要するに、日本のマンガ、特に少年マンガは世界に残された唯一の「ビルドゥングスロマン」なのである。そこにはアイデンティティ・ポリテイクスもなければ、国民国家や政

府の望む勝利の歴史もない。マンガは人間社会はどこまでも複雑であることを若者に教えようとしている。

以上が山本先生の論考（の後半部）です。これを読んで、僕は天を仰ぎました。そうか、欧米の文化には「修行」という概念が欠けているのか、と。それについて山本先生の驥尾きびに付していささか思うところ述べたいと思います。